山陰に息づく「一式飾り」の習俗（２）
― 島根県出雲市平田町を事例として ―

高橋 健司

Folkways of “Isshiki-kazari” in the San-in Region (2)
: A Case Study of Hirata-cho, Izumo City, Shimane Prefecture

TAKAHASHI Kenji

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第17巻　第3号　抜刷
REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.17 / No.3
令和3年 3月 26日発行　　March 26, 2021

山陰に息づく「一式飾り」の習俗（２）

― 島根県出雲市平田町を事例として ―

高橋健司*

Folkways of "Isshiki-kazari” in the San-in Region (2)
: A Case Study of Hirata-cho, Izumo City, Shimane Prefecture

TAKAHASHI Kenji*

キーワード：「一式飾り」，民俗造形，「神幸祭（おたび)」，「見立て」の趣向，趣向の精神，「神遊び」
Key Words : “Isshiki-kazari”，Folk Modeling，“Otabi”，Device of “Mitate”，Spirit of Device，“Kami-asobi”

Ⅰ．島根県出雲市平田町の「平田一式飾り」

1.「平田一式飾り」の起源

「一式飾り」とは，山陰の六つの地域（鳥取県の南部町法勝寺地区と島根県の出雲市平田町，出雲市斐川町直江地区,雲南市掛合町,奥出雲町横田地区，奥出雲町下横田地区）の祭りにおいて，地域の住民が生活道具一式を見立てた作品を飾って競い合う年中行事・民俗造形であり，地域で世代を超えて受け継がれ，暮らしに息づく習俗である[1]。

このうち,島根県出雲市平田町の「平田一式飾り」は長い歴史を誇り，平田町の寺町在住の遠藤義一郎氏が,古老への聞き取りをもとに 1929 年(昭和４年)に著した『一式飾り史要』によれば,「平田一式飾り」は 1793 年（寛政５年）に寺町の表具師であった桔梗屋十兵衛が始めたとされる[2]。

『一式飾り史要』の中で，桔梗屋十兵衛は「常に神仏を崇敬すること多大」で「悪疫の有無にかかわらず天満宮のおたびを祭典の例式とすること，かつ寺町において神輿の駐御し賜わんことを一心に祈願し御神裁を仰ぐこと三年に及び，ついに寛政五年祭典当日御神勅により祈願全部叶えり」と記され，祈願が叶ったことに狂喜した十兵衛は「先ず獅子を以って神輿を迎え奉ると同時に急遽茶器一式の飾りを考案し即ち茶臼をもって米俵に扮し其の上に大黒天の立像を飾り，御神慮を慰め奉れり。即ち御腰掛けの創始にして又一式飾りの起源なり」と，桔梗屋十兵衛を「平田一式飾り」の創始者とする[3]。

これにより,「平田一式飾り」は平田天満宮祭礼で神輿が巡行する「神幸祭（おたび)」を契機として始まり,「おたび」で神輿が各町内の宿に駐御する「お腰掛」が毎年の恒例行事となって,「お腰掛」の際に神慮を慰めるために，各町内が桔梗屋十兵衛と同様に生活道具一式で作品を作って飾り，天満宮の祭神に奉納するようになったと考えられる。

現在でも「おたび」は毎年７月 20・21 日に開催される平田天満宮祭礼の２日目に行われ，天満宮を出発した神輿が寺町から順番に各町内を巡り，各町内の宿に飾られた「一式飾り」の作品の前で，図１の「お腰掛」の光景が見られる。

このように，平田町では住民が「一式飾り」を神事の一環として行う習俗が続けられ,「平田一式飾り」は創始者の桔梗屋十兵衛をはじめ，地域の人々の信仰によって支えられながら，代々受け継がれてきたと言える。

図１　平田天満宮祭礼の「おたび」で行われる「お腰掛」
（2012 年 筆者撮影）

＊鳥取大学地域学部地域学科

２. 近世・近代の「平田一式飾り」

出雲市平田町は，出雲大社と松江をつなぐ中間に位置し，江戸時代には宍道湖と平田船川運河の水上交通を利用した物資の集散地として繁栄した。特に出雲平野で当時盛んに栽培されていた木綿は，平田に集積されて大阪に出荷され，大阪で品質の良さが評判となって商取引が増加し，江戸時代後期の平田は，木綿関連の商人を中心に文化の全盛時代を迎えたとされる[4]。

それゆえ，商取引で大阪との交流を深めた平田に上方の文化が伝わり，当時上方で「造り物」と呼ばれて流行した祭りを彩る飾り物が，平田でも作られるようになり，地域に根づいたと考えられる。

その最古の記録が，平田天満宮に近い宮ノ町に残され，そこには1822年（文政５年）から1883年（明治16年）までの各町内の作品が記されて，1856年（安政３年）の記録には，11点の作品名と材料や順位が記されていたとされる[5]。このうち，寺町と市場では茶器一式の作品が飾られ，創始者の桔梗屋十兵衛と同様に茶器を用いて制作している。

また，1856年（安政３年）の記録には，馬具一式を用いて「蝶」に見立てた作品も記され，これについて民俗学研究者の西岡陽子は，1837年（天保８年）に大阪で出版された『造物趣向種（つくりものしゅこうのたね）』に描かれた作品に酷似すると指摘し，上方文化の「流行の力は驚くべきもの」と述べる[6]。この『造物趣向種』は平田町に残されていないが，筆者は同書が現存する鳥取県南部町と同様に，かつて平田でも『造物趣向種』を手本として，作品作りが行われた可能性が高いと考える[7]。

その後，明治時代になると平田では木綿から生糸に転換して製糸業が発達し，明治末期には工業都市として繁栄した。このような好景気を背景に，明治末期の新聞で「平田一式飾り」の名称が用いられるようになり，祭りで飾られた作品が紹介されるなど，「平田一式飾り」の盛んな様子が分かる。

例えば，1908年（明治41年）7月26日の『山陰新聞』には「全町独特の飾物は本年は概して安物揃へなりしも其割に上出来ありき」と記され，20箇所に飾られた作品とその材料も詳しく紹介されて，当時の人々の関心の高さが窺える[8]。

さらに大正時代になると，1917年（大正６年）に作品コンクールが始まり，新聞紙上で１等の作品が紹介されるなど[9]，作品競争が盛んになっている。作品コンクールは平田の人々の競争心を刺激し，各町内が競って作品に趣向を凝らす原動力になったと言えよう。

こうして多くの人が「一式飾り」に興じた時代に，「平田一式飾り」の中興の祖として知られる千把雲陽氏（1889年～1975年）が登場して活躍している。千把氏は高等小学校時代から「一式飾り」に強い興味を持ち，23歳の時に「将来一式飾りがうちすたれて行くのではないかと深く思慮」して「伝統的一式飾りの創意工夫の改善」に取り組むことにしたと，自らの履歴に記している[10]。

千把氏の「創意工夫の改善」とは，「平田一式飾り」に用いる新たな材料の開拓と，より大型で動きのある作品を作るための制作法の開発である。千把氏は作品に従来用いられていた茶器や陶器の他に，新たに学用品や自転車部品などを使って作品を作り，また，作品の支柱に金網を貼り付けて大量の材料を結びつける方法を考案して，ダイナミックな作品作りに成功している[11]。

この結果，千把氏の作る作品は人気を呼んで県外にまで名声が広まり，昭和時代になると日本各地や日本の植民地であった朝鮮の京城に招聘されて作品を飾り，「平田一式飾り」を世に知らしめた。

このように千把氏は進取の気性に富み，工夫を凝らして「一式飾り」の創作に打ち込んだことで，平田独自の「一式飾り」を生み出し，現在の「平田一式飾り」の基礎を作ったと言える。

戦後，千把氏は「平田一式飾り」の後継者の育成に尽力し，晩年には「後世，この平田一色飾りの伝統技術を継承研究しようと思われる人々のために雲陽創作による小形飾りを残して置きたい」と述べ[12]，図２の茶器一式の「大黒天」を残している。この作品には千把氏の「見立て」の趣向が凝らされ，桔梗屋十兵衛が茶器で作った「大黒天」を彷彿とさせる。

図２　千把雲陽作・茶器一式「大黒天」
（2020年 平田一式飾り保存会提供）

３. 戦後の「平田一式飾り」

戦後の「平田一式飾り」は，社会の混乱と変化によって存続が危惧される状況となり，1952 年に平田一式飾り保存会が「一式飾り」の伝統の継承を掲げて結成された。

当時の平田では各町内で家庭の道具を借りて作品を制作するのが難しく，平田一式飾り保存会は平田天満宮奉納平田一式飾り競技大会(作品コンクール)を続けるため,作品に用いる道具の調達に取り組み,大量の陶器を購入するなどした。そして調達した道具を保存会が一括して保管し，祭りの際に各町内に貸し出す体制を整えた。

このため，各町内の作品作りの負担は減ったが，作品に用いる道具が陶器一辺倒となり，近年はⅢ章で取り上げる１団体を除いて，ほとんどの町内が陶器一式で作品を制作・展示するようになった。

また，平田一式飾り保存会は広報活動にも力を入れ,「平田一式飾り」の知名度の向上を目ざして，保存会の技術部長・副会長の加納英雄氏（1942 年生）を中心に，保存会員が以下のような作品を制作し，大都市の美術館や博物館で展示した。

まず図３の「海老」は，戦前の 1934 年に自転車用品一式を用いて初めて制作され，1980 年に再制作されて保存されていたものを，加納氏らが修復した三代目の作品である。「海老」は 2008 年に東京のサントリー美術館で開催された「KAZARI 日本美の情熱」展に出展されて好評を博し,同年に京都文化博物館,広島県立美術館でも展示された。その後「海老」は 2009 年に広島市現代美術館で開催された「一人快芸術」展にも出展され [13]，今では「平田一式飾り」の代表作として，平田町で常設展示されている。

次に，大阪の国立民族学博物館から展示作品を依頼され，加納氏らは 2012 年に陶器一式で「弁慶と牛若丸」を制作し，同館で常設展示されている。

そして，2016 年に同館で開催された「見世物大博覧会」展にも，加納氏らが陶器一式で制作した「桃太郎」が出展され，多くの観客の目に触れて「平田一式飾り」の知名度を上げた。

こうした町外での活発な作品展示によって，マスコミが「平田一式飾り」を取り上げる機会も増え，2015 年に「輝け！第 18 回みうらじゅん賞」を受賞するなど,「平田一式飾り」の評価が高まった。

この結果,「平田一式飾り」は平田町の観光資源として注目されるようになり，常設展示が増えて一年中作品が飾られている。また作品コンクールでも，作品の見栄えが重視されるようになり，年々写実的な作品が増加している。

例えば，図４の「フラメンコ」は，2011 年の作品コンクールで特選に選ばれた西町の作品で，西町在住の加納英雄氏が陶器一式で制作した。この作品を実際に目にした筆者は，ダンサーの気迫に満ちた姿が強く印象に残っている。

一方，他の町内では「フラメンコ」のようなインパクトのある作品を作ることが難しく，近年は自力で制作することを諦め，平田一式飾り保存会に制作依頼する町内が増えている。

平田の人々は，長年に渡って作品作りに興じてきたが，町外から「平田一式飾り」の評価が高まるにつれ，より見栄えのする作品が期待されるようになり，負担感が増している。

これに対し,「一式飾り」は江戸時代の庶民が生活道具を見立てて遊ぶ「見立て遊び」の流れを汲み [14]，「見立て」の趣向を楽しむ文化と言える。それゆえ「一式飾り」の伝統の継承には,町外の評価よりも,住民が「見立て」の面白さを見直し，暮らしに「見立て遊び」を取り戻すことが必要と考える。

図３　自転車用品一式「海老」
（2011 年 筆者撮影）

図４　陶器一式「フラメンコ」
（2011 年 筆者撮影）

Ⅱ.「一式飾り」の「見立て」の趣向

先述の千把雲陽氏は1953年の『島根新聞』紙上の座談会で,「平田一式飾り」の制作法について「長年の無言の約束とでもいうか，小さい品を微細に組み合せた説明的写生的なものはとらず大きい品を荒っぽく寓意的に使うことになっているので，そこに自ら材料に制限が生れるので骨を折る」と述べ[15],「見立て」の趣向を重んじる「一式飾り」の伝統について触れている。

また，千把氏は「他府県の依頼で方々へ出張して飾ったこともあるが，見る人の洗練が足らぬためか写生的説明的なものが受けて，寓意的な表象を見てくれぬ。顔に目鼻をつけなくても目鼻をつけた以上の表情を表現するところに一式飾りの真価があるのだが」と述べ[16],「見立て」の趣向は「一式飾りの真価」であるにもかかわらず，それが観客から評価されない風潮を憂慮している。

このように千把氏が指摘した「一式飾り」の「見立て」の趣向の衰退は，今や他地域に限った問題ではなくなっている。平田町でも近年は作品の見栄えを重視する風潮が強まり，小さな陶器を緻密に貼り付けて写実的に表現する作品が増えている。

その一方で，平田町では「見立て」の面白さを堪能できる作品も飾られている。特にカエル,タヌキ,カメ，コイといった，生きものの形の陶器を見立てた作品は毎年のように飾られ，中でも陶器のカエルの置物は頻繁に用いられている。

例えば，図５の「アナと雪の女王」は，2014年に元町が話題のアニメ映画の一場面を陶器一式で制作した作品で，主人公が乗るトナカイにカエルの置物が多数用いられている。

一見しただけではカエルの使用に気づかないが，図６の部分拡大を見ると，トナカイの顔には下向きにした大型のカエルが用いられ，カエルの目がトナカイの鼻の穴に見えることが分かる。さらに，小型のカエルを重ねてトナカイの頭を表現する工夫も見られ，巧みな「見立て」の趣向が観客を楽しませてくれる。

また，図７の「孫悟空」は，2015年に宮西町が陶器一式を用いて，孫悟空が筋斗雲に乗って滑空する場面を制作した作品で，この作品にもカエルの置物が用いられている。

孫悟空の顔に目鼻は付いていないが，図８の部分拡大では，上下反対の大型のカエルの置物がサルの顔に見えることが分かる。さらに，よく見ると孫悟空の両拳にも小型のカエルが用いられていることに気づき,「見立て」の妙を味わえる。

この他にも，地域で人気のある出雲神話のスサノオノミコトのオロチ退治をテーマにした作品に，カエルの置物がよく用いられている。作品のオロチは「龍」の姿で表現され,「龍」の頭にカエルが用いられることが多い。

そこで，カエルの置物など陶器一式を用いた「見立て」の趣向について学ぶために，2016年に平田一式飾り保存会の加納英雄氏に「龍」の頭の制作を見せて頂いた。図９から図12は加納氏の制作の様子である。加納氏はカエルの置物を５点（大型１点，中型２点，小型２点）用意し，制作を開始した。

まず加納氏は図９の中型のカエルの底部を向かい合わせにして「龍」の鼻に見立て，それを大型のカエルと組み合わせて「龍」の頭の下部を作った。次に図10の小型のカエルを「龍」の頭の上部に配置し，さらにその上に図 11 のサザエの形をした食器と黒い箸置きを組み合わせて載せ,「龍」の目に見立てた。そして図 12 の金メッキされた大小の燭台を組み合わせて頭の上に載せ,「龍」の角に見立てた。最後に加納氏は燭台を使った「龍」の下あごを付け，躍動感のある「龍」が完成した。

以上のように，カエルの置物は様々な「平田一式飾り」の作品に用いられ，平田町では機知に富んだカエルの「見立て」の趣向が，作り手の腕の見せ所となっている。

これに関し,美術史・見世物研究者の木下直之は，江戸時代の「造り物」の「見立て」の趣向について「この造形表現は，同一種類の材料を用いること，それが何であるかが明かされていることを大前提とする。いわば，材料と造形物の落差を楽しむのである」とし[17],「造り物」は「材料には既製品，それも日用品が用いられること。普段から見慣れたものに，思いがけない用途，かたちを与えることが喜ばれ，その趣向が競われた」と指摘する[18]。

また，美術史研究者の辻惟雄も「斬新奇抜な『見立て』の趣向を生み出すこと―それは『つくりもの』の作者が絶えず意図し，努力してきた表現の目的であった」とし,「それは『型』による日本文化の対極にありながら，こと造形の分野に関する限り，その性格形成に重要な役割をはたしてきた」と「つくりもの」の「見立て」の趣向を高く評価する[19]。

まさに山陰の「一式飾り」の「見立て」の趣向は，江戸時代の「造り物」の伝統を受け継ぐものであり，この「型」に固執しない創造的な造形の伝統こそが，平田町をはじめ山陰各地の「一式飾りの真価」と言えよう。

図５　「アナと雪の女王」（2014 年　筆者撮影）

図６　「アナと雪の女王」部分拡大（2014 年　筆者撮影）

図７　「孫悟空」（2015 年　筆者撮影）

図８　「孫悟空」部分拡大（2015 年　筆者撮影）

図９　「龍」の制作①（2016 年　筆者撮影）

図 10　「龍」の制作②（2016 年　筆者撮影）

図 11　「龍」の制作③（2016 年　筆者撮影）

図 12　「龍」の制作④（2016 年　筆者撮影）

Ⅲ.「一式飾り」の趣向の精神

近年の平田天満宮祭礼では，平田一式飾り保存会が貸し出す陶器を用いて制作した作品が大半となる中，毎年独自に材料を調達して新たな制作に挑戦する団体が存在する。それが女性だけで構成される，ひらた蓬の会である。

ひらた蓬の会は2005年に結成された女性団体で，代表を務める平田明子氏（1950年生）に話を伺うと，現在の「平田一式飾り」は陶器一式の作品がほとんどで，作品のテーマも古典的で難解なものが多いことに疑問を感じ，伝統行事に新風を送り込むことを目標に，2006年から「一式飾り」の制作・展示を始めたとのことである。

また，平田氏は若い時から市場町内の年番として作品作りに参加し，市場の中心的存在で平田一式飾り保存会の会長を務めた伯父の大島庄八氏の手ほどきを受けて「平田一式飾り」に親しんだが，平田町では制作が男性中心に行われ，女性が思い通りに制作するのが困難と感じ，ひらた蓬の会の女性会員と共に，女性の感性を活かした作品作りを目ざすことにしたそうである。

表１は，ひらた蓬の会が平田天満宮祭礼で制作・展示した14点の作品一覧で，このうち図13から図21の９点は，筆者が実際に目にした作品である。まず，作品のテーマを見ると，童話が４点（「星織り姫」，「ヘンゼルとグレーテル」，「人魚姫」，「ムーミン谷の四季」），神話が４点（「オロチ君」，「アメノウズメ」，「黄泉比良坂」，「月読命伝説」），映画やドラマが４点（「アナと雪の女王」，「バルサとチャグム」，「シン・ゴジラ」，「海の仲間たち」）と，大人も子どもも親しめる物語が多い。

次に作品の材料を見ると，キッチングッズ一式が３点，手芸用品一式が２点，ガラス一式が２点の他，キッズグッズ一式，テーブルウェア一式，音楽関係一式，ランドリーグッズ一式，ガーデニング一式，事務用品一式，掃除道具一式が各１点と，陶器一式が主流の他の町内とは対照的に，ひらた蓬の会では陶器を使用せず，他の町内が用いない斬新な道具を積極的に用いている。

例えば，図13の「オロチ君」は，洗濯に用いるランドリーグッズ一式を用いて出雲神話のオロチを作った作品で，洗濯用ブーツを裏向きに組み合わせてオロチの口に見立て，洗濯機に使う丸いネットはオロチの目に見立てるなど，奇抜な道具の「見立て」が観客の笑いを誘い，楽しませてくれる。

このように，ひらた蓬の会は新たなテーマの開拓だけではなく，平田一式飾り保存会が提供する陶器に頼らずに新たな材料を探求し，作品に多様な生活道具を取り込んで活用している。

こうした創意工夫の結果，ひらた蓬の会の作品は2018年までの13年間に，作品コンクールで11回アイデア賞を受賞し，2019年は図21のガラス一式で海中の世界を色鮮やかに表現した「海の仲間たち」が新設の創造賞に選ばれ，同会の作品に対する評価が高まっている。

かつて平田氏の伯父の大島庄八氏は，「一式飾り」は「神様への奉納物」であり「ひとたび神様にご覧に入れたものは二度と作らない」と語り，作品を「毎年新たに考案するというのは，古来からのしきたりは絶対に変更してはならないという通常の神祭りとは逆で，一式飾りの独自な点だが，日々知恵を絞らなくてはならないということでもある」と指摘したように[20]，ひらた蓬の会は「一式飾り」の創意工夫を重んじる趣向の精神に則り，毎年新たな作品作りに知恵を絞っている。

このような「一式飾り」の趣向の精神は，鳥取県南部町法勝寺地区でも息づき[21]，山陰の「一式飾り」の伝統を刷新して活性化する原動力となっている。

表１　「ひらた蓬の会」の作品一覧

制作年	作品名	材料
2006年	「星織り姫」	キッチングッズ一式
2007年	「ヘンゼルとグレーテル」	手芸用品一式
2008年	「ディズニー・ファンタジー」	キッズグッズ一式
2009年	「ジオラマわが町平田」	テーブルウェア一式
2010年	「人魚姫」	音楽関係一式
2011年	「オロチ君」（図13）	ランドリーグッズ一式
2012年	「アメノウズメ」（図14）	キッチングッズ一式
2013年	「黄泉比良坂」（図15）	キッチングッズ一式
2014年	「アナと雪の女王」（図16）	ガラス一式
2015年	「ムーミン谷の四季」（図17）	ガーデニング一式
2016年	「バルサとチャグム」（図18）	事務用品一式
2017年	「シン・ゴジラ」（図19）	手芸用品一式
2018年	「月読命伝説」（図20）	掃除道具一式
2019年	「海の仲間たち」（図21）	ガラス一式

図 13 「オロチ君」（2011 年 筆者撮影）

図 14 「アメノウズメ」（2012 年 筆者撮影）

図 15 「黄泉比良坂」（2013 年 筆者撮影）

図 16 「アナと雪の女王」（2014 年 筆者撮影）

図 17 「ムーミン谷の四季」（2015 年 筆者撮影）

図 18 「バルサとチャグム」（2016 年 筆者撮影）

図 19 「シン・ゴジラ」
（2017 年 筆者撮影）

図 20 「月読命伝説」
（2018 年 筆者撮影）

図 21 「海の仲間たち」（2019 年 筆者撮影）

Ⅳ.「神遊び」の造形としての「一式飾り」

2020 年は新型コロナウイルスが日本中で流行し，感染防止のため各地の行事が中止となる中，平田天満宮祭礼の「おたび」が中止され，「平田一式飾り」の作品コンクールも取り止めとなった。ところが，平田町では恒例の行事が行われなくても「一式飾り」は作り続けられている。

まず，2020 年３月に平田一式飾り保存会が図 22 の「事解男命（ことさかのみこと）」を陶器一式で制作し，平田天満宮を合祀する平田町の宇美神社に奉納した。これは宇美神社の祭神である事解男命を作った作品で，悪縁を断ち切る神として知られる事解男命に因み，新型コロナウイルスの退散を祈って制作された。

次に，2020 年７月に平田一式飾り保存会が「みんなで作ろう一式飾り」を開催し，イベント参加者が図 23 の「妖怪アマビエ」を陶器一式で制作した[22]。人魚のような容姿のアマビエは疫病除けの「守り神」と信じられ，参加者がコロナの終息を祈る言葉を書いた陶器の皿を，アマビエのウロコに見立てて張り付けていった。

続けて，７月に神事のみ行われた平田天満宮祭礼では，３作品が自主的に制作されて町内に飾られた。このうち，寺町は陶器一式で「疫病退散 鷺舞奉納」を作り，元町も陶器一式で「アマビエ」を作ったのに対し，ひらた蓬の会は図 24 の「カルテット」をガラス一式で制作した。これはガラスの食器などをピアノ，バイオリン，チェロを演奏する４名の女性に見立てた作品で，照明で美しく輝いて見えた。同会代表の平田明子氏によれば，新型コロナの流行で演奏会が自粛される状況を憂い，コロナの終息と芸術活動の再開を祈って制作したとのことである。

このように平田町では江戸時代と同様，疫病退散を神に祈って「一式飾り」が制作・奉納されたが，これに関し民俗芸能研究者の郡司正勝は「神は本ものの鬱陶しさを悦ばない。趣向という精神の働きの喜びがないからである。神を迎える祭りの日には，人々は精いっぱいに趣向を『見立』て，造り物をして，あっといわせる。神はこれを『風流』として受納する」と述べ，「見立とは，根源の本物を予測させ，その時々の新たなる発想で装うことによって，光り輝かせることである。『遊び』の真意もここにあろう。その神遊びの造形が，造り物である」と指摘する[23]。それゆえ「造り物」にルーツがある「一式飾り」もまた「神遊び」の造形に他ならない。

一般に「神遊び」は神楽などの神に捧げる芸能とされているが，古典芸能研究者の林和利によれば，本来「神遊び」は「神が遊ぶ」または「神と遊ぶ」という意味で，「『神遊び』の神は第三者ではなくて共に楽しむ存在」であり，林は「みんな一緒になって神と戯れ遊ぶ場」であった民俗芸能の「神遊び」は「今や急速に失われつつある」と指摘する[24]。

これに対し，平田町では地域の神社の祭神を「一式飾り」で慰め，神と人が共に遊び楽しむ「神遊び」が，今も熱心に続けられている。この「神遊び」の作法が，「一式飾り」の「見立て」の趣向であり，「神様への奉納物」である「一式飾り」の制作のために，地域の人々が「見立て」の趣向に興じ，「趣向という精神の働きの喜び」で神を喜ばせる習俗が暮らしに息づいている。

そこには，民俗芸能研究者の守屋毅が「『風流』の世俗化」と指摘する[25]，庶民の信仰と娯楽の一体化が見られ，「神遊び」すなわち「見立て遊び」の造形である「一式飾り」は，コロナ下の人々を力づけ，暮らしに活力をもたらしていると言えよう。

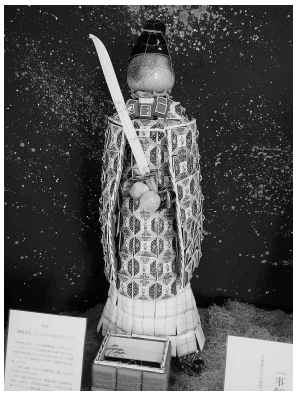

図 22 「事解男命」
（2020 年 筆者撮影）

図 23 「妖怪アマビエ」
（2020 年 筆者撮影）

図 24 「カルテット」
（2020 年 筆者撮影）

謝辞

フィールドワークに際し，多大なご支援とご教示を賜った平田一式飾り保存会と同会技術部長・副会長の加納英雄氏，ひらた蓬の会と同会代表の平田明子氏に対し，心より御礼申し上げる。また，鳥取大学の教育研究プロジェクト（戦略３－１）「山陰の地域課題研究を通じた人口希薄化社会の新たな価値発見・創造のための教育研究プログラム」の一環としてご支援頂いている鳥取大学地域価値創造機構に対し，感謝申し上げる。

注

1　山陰の「一式飾り」と西日本各地の「造り物」・「飾り物」については，拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（1）－鳥取県南部町法勝寺地区を事例として－」『地域学論集』第17巻第２号，鳥取大学地域学部，2020年，並びに以下の研究調査報告書を参照されたい。『「一式飾り」調査報告Ⅰ　若者の視点から見た「一式飾り」』鳥取大学地域学部高橋健司研究室，2014年，『「一式飾り」調査報告Ⅱ　地域教育を通した「一式飾り」の継承』同，2015年，『「一式飾り」調査報告Ⅲ「見立て遊び」の伝統の継承』同，2016年，『「一式飾り」調査報告Ⅳ「一式飾り」の価値の探究と継承』同，2017年，『「一式飾り」調査報告Ⅴ「一式飾り」に見る伝統の持続性』同，2018年，『「一式飾り」調査報告Ⅵ「一式飾り」に見る「見立て」の創造性』同，2019年，『「一式飾り」調査報告Ⅶ「一式飾り」に見る「風流」の伝統』同，2020年。

2　平田本陣記念館「一式飾り（市無形民俗文化財）」平田本陣記念館ホームページ(https://www.izumo-zaidan.jp/honjin/honjin_facility/hiratahonjin_syuuzou/kougei/12)。

3　同上。

4　木綿街道振興会「歴史と街づくり活動の経緯」第９回住まいのまちなみコンクール国土交通大臣賞受賞応募書類，2013年。現在，平田町では街並み景観・歴史・文化等の資源を活用し，地域の活性化を図ろうとしている。このうち，歴史的な景観が残る木綿街道が上記のコンクールで国土交通大臣賞を受賞している。

5　「昔の一式飾」『島根新聞』1958年７月20日。なお，宮ノ町にあったとされる記録は，新聞に掲載された後，所在が分からなくなっている。

6　西岡陽子監修『平田一式飾り　追録版』平田一式飾り保存会発行，2018年，19頁。『造物趣向種』は1787年（天明７年）に初めて大阪で出版され，1837年（天保８年）と1860年（安政７年）に大阪で続編が出版されている。

7　鳥取県南部町に現存する『造物趣向種』（明治時代の再版）については，前掲の拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（1）－鳥取県南部町法勝寺地区を事例として－」を参照されたい。

8　西岡陽子監修，前掲書，20頁。

9　西岡陽子監修，前掲書，22－23頁。

10　千把雲陽「千把雲陽自筆履歴」西岡陽子監修，前掲書，33頁。

11　西岡陽子監修，前掲書，28頁。

12　千把雲陽「千把雲陽自筆履歴」西岡陽子監修，前掲書，35頁。

13　2009年の「一人快芸術」展には，ひらた蓬の会が玩具などのキッズグッズ一式を東京ディズニーランドのシンデレラ城とパレードに見立てた「ディズニー・ファンタジー」も出展され，自転車用品一式の「海老」と並んで好評を博している。

14　「一式飾り」の手本となった『造物趣向種』は，江戸時代後期に流行した「見立絵本」の一種であるが，日本文学研究者の中野三敏は，1755年（宝暦５年）に江戸で出版された『絵本見立百化鳥』が，「見立絵本」の魁（さきがけ）となり，その後を追って同想同趣の「見立絵本」が江戸や上方で次々と出版され流行したと指摘する。中野三敏「見立絵本の系譜－『百化鳥』の余波－」中野三敏『戯作研究』中央公論社，1981年，296－297頁。筆者は『絵本見立百化鳥』が描く，身近な生活道具を即興で鳥に見立てる「見立て遊び」が，江戸時代の人々の滑稽さを楽しむ「遊び心」を刺激し，後に『造物趣向種』が出版されて全国的な「造り物」の流行に繋がったと考えている。詳しくは拙稿「『一式飾り』探訪記　第６回　粋な『見立て』の美学」『島根日日新聞』2018年４月11日を参照されたい。

15　「伝統に安心するな　巧拙よりも時代感覚」『島根新聞』1953年７月21日。

16　同上。

17　木下直之「解説」朝倉無声『見世物研究』ちくま学芸文庫，2002年，555頁。

18　木下直之「正遷宮のかざり」辻惟雄編『「かざり」の日本文化』角川書店，1998年，280頁。

19　辻惟雄「『つくりもの』文化と日本」『〈季刊〉PANORAMIC MAGAZINE is（イズ）№78』ポーラ文化研究所，1997年，40頁。

20　西岡陽子監修，前掲書，81頁。

21　鳥取県南部町では「法勝寺一式飾り」が「知恵比べ」と称され，「見立て」の趣向が重んじられている。詳しくは前掲の拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（1）－鳥取県南部町法勝寺地区を事例として－」を参照されたい。

22　鳥取県南部町でも新型コロナウイルスの流行によっ

て「法勝寺一式飾り」が中止されたが，2020年4月に南部町在住の高校生のサークルが，疫病退散を祈って漆器一式の「アマビエ」を制作して町内に飾り，話題となっている。

23　郡司正勝「山と雲－風流の図像誌－」『郡司正勝刪定集　第六巻』白水社，1992年，180－181頁。

24　林和利「『神遊び』考－異物をめぐって－」『名古屋女子大学　紀要　61』2015年，355－366頁。

25　守屋毅「近世の祭礼と山車」守屋毅『近世芸能文化史の研究』弘文堂，1992年，134頁